Unnamed Memory　『ともしび』　　古宮九時

年の変わり目というものは、ティナーシャにとってあまり意味のあるものではない。
四百年以上も生きてきた魔女なのだ。一年が過ぎ去ったとしても何が変わるわけでもない。ただ目的を果たせぬまま生き続けている己に、苦々しさを覚えるだけだ。
塔の最上階から、彼女は何もない荒野を見つめる。
夜に浸されたそこはただの暗闇だ。ただ空に満天の星が広がるだけの眺めをティナーシャは見下ろした。使い魔のリトラが隣にやってくる。
「マスター、何かお飲みになりますか？」
そんなことを聞くのは、今が一年の終わりだからだろうか。ティナーシャは苦笑する。
「じゃあ何か酒を見繕ってきてくれ」
「かしこまりました」
リトラの気配が消えると、ティナーシャは再び外の景色に向き直る。夜の風が長い髪を揺らした。
音はない。荒野を照らす灯など一つも。
慣れきった孤独に魔女は長い睫毛を伏せる。

※

「ティナーシャ、ほら来てみろ」
長椅子の上でへたっていた魔女は、そう言われて顔を上げた。
「何ですか……割と疲れてるんですけど……」
つい今まで彼女は、新年の儀の守護結界を厳重に張っていたのだ。水をも漏らさぬ警備の反動で疲れ果てているティナーシャを、オスカーはそっと抱き上げる。
そのまま彼は、魔女を連れて部屋の露台に立った。
「見てみろ、ほら」
言われてティナーシャは窓の外を見る。――そして、息をのんだ。
眼下を埋め尽くす無数の灯。
それは新年を祝う人々が掲げるランタンの明かりだ。
人一人一人が作る光の海。その光景に彼女は闇色の目を見開いた。大きな目に零れんばかりの感情が生まれる。何も知らない少女のように、全てを知っていて諦めていた女のように、ティナーシャは小さな唇を震わせた。ようやく掠れた声を絞り出す。
「……綺麗です」
「そうだろう。年越しの時にはいつもこうだ」
男の言葉は優しい。彼は言わずとも、彼女の欠けたる部分を分かっているようだ。
ティナーシャは焦がれるようにじっと揺れる灯かりを見つめる。オスカーが彼女に囁いた。
「人と暮らすのも悪くないだろう？」
「……そうかもしれませんね」
恋人の言葉に頬を緩めて、ティナーシャは潤みかけた目を閉じる。
あれほど変わらずにいた年月が、今は一秒ごとに色を変えていくようだ。
その幸福に魔女は長い睫毛を伏せて、言葉なく微笑んだ。